



雲の向こうの太陽 (Post nubila Phoebus)

思い描いていた場所ではないけれど

井上茂義 Shigeyoshi INOUE

進歩賞をいただいたときは、ちょうどミュンヘンへの異動直前で、どこか前のめりで、いわばギラギラしていた時期だった。常に肩に力が入り、空回りすることも少なくなかった。当時は、これほど長くドイツにいることになるとは思もしなかったし、渡独前にはアカデミアのキャリアを強く意識していたわけでもなかった。ただ、目の前のことに向き合っていた。気が付けば、思い描いていた場所とは少し違うところに立っている。しかし、その「違い」も、いつしか自然なものになっていた。振り返ったときに、「これでよかった」と思えるなら、それで十分なのかもしれない。本稿では、これまでを少し振り返ってみたい。

4 月中旬

春のビール祭りが始まり、バイエルンの伝統衣装であるレーダーホーゼやディアンドルをまとった人々が街がにぎわい始める。ゲスト講演後の夕食会 (Nachsitzung) では、同僚の A 教授の「鉄板ネタ」が始まる。ゲストにとっては新鮮な話題だが、何度も聞いているこちらとしては、ほとんど暗唱できるほどだ。愛想笑いのタイミングもだいたい板についてきた。空気を読みながら適度に相槌を打ち、その後に続く B 女性教授の辛辣なジェンダージョークに、シニアの先生方の反応を横目に小さく笑う。

いつもどおり無難にやり過ごし、帰り道でふと現実に戻される。どこか違う。

ミュンヘンに異動してからの 11 年間は、自分の想像とはかなり違っていた。それまでベルリンで築いてきたものが一度リセットされ、ゼロからの再出発だった。ベルリンにきた頃に似た感覚でもある。研究だけでなく、教育、学科運営、人間関係、そして優秀な学生に研究室を知ってもらうことまで、そのすべてをもう一度型から作り直していくような時間だった。ここでさらに一段ギアを上げなければならないと感じたと

いのうえ・しげよし

ミュンヘン工科大学化学科 教授 (W3)

〔経歴〕 2008 年筑波大学数理物質科学研究科博士後期課程修了、博士 (理学)。同年ベルリン工科大学アレクサンダー・フォン・フンボルト財団博士研究員、09 年同大学化学科日本学術振興会海外特別研究員、10 年同大学化学科教授、15 年ミュンヘン工科大学化学科教授 (W2)、20 年より現職。

E-mail: s.inoue@tum.de



TUM Raitenhaslach Campus Burghausen 城前 (世界最長の城)

き、関西芸人の「二度売れなければならない」という言葉を思い出す。もっとも、自分が一度売れたのかどうかはさておき。

ベルリン時代には距離を置いていた学科運営や、どちらかといえば罰ゲーム的な重めの業務にも取り組むようになった。所属する化学科は、外から見える印象以上に保守的で、独特の「作法」がある。それらを理解するのに時間もかかった。教授会の意思決定も非常に政治的で、ときに 1 つ決めるのに論文 1 本書けそうなくらい議論が長引く。純粋にサイエンスに集中したいという思いとは裏腹に、一見非効率に見えることにも多くの労力を割くことになった。

焦りとプレッシャーに押しつぶされそうになる時期もあった。複数の大型 EU グランツの獲得や、評価につながる論文を何年か出し続ける中で、周囲の空気が少しずつ変わっていくのを感じた。良くも悪くも、この国では成果で比較的フラットに評価される。もちろんそれだけではないが、外国人教員の場合、より結果

を示すことが求められる場面も少なくない。裏を返せば、ここでやっていくには、それが最もわかりやすく、確実な道の1つなのだろう。

近年、研究者の評価はかなりスポーティーになってきており、必ずしも健全とはいえない。ドイツのアカデミアにも、そうした空気を感じる場面は少ない。それでも、まずは目の前の課題に向き合っていく。

4 月下旬

出張帰りの時差ぼけの中で参加した教授会も、なかなか終わる気配がない。この文化では発言しないことは同意と見なされるため、議論はどうしても長くなる。隣に座ったC教授からやや重い依頼を受けるが、今回は断ることにした。C教授は肩書きによって態度が変わるところがあり、正直少し苦手だ。最近、無理なものは無理とする鈍感力も少し身についてきた。その夜もゲスト講演後に Nachsitzung へ。顔なじみの店員に Kellerbier を注文する。ほかの教授には敬語なのに自分にはタメ口で少し苦笑する。どこか軽く見られているのかもしれない。A教授のネタも相変わらずで、もはやそれが出てくるのをどこかで待っている自分もいる。

帰り道、またふと立ち止まる。やはり少し違う。

研究室を立ち上げて16年目に入った。研究に対する基本的なスタンスは変えていないつもりだが、1人では進められない以上、状況に応じた柔軟さも必要だった。変えないものと変わっていくもの、その間を行き来してきた。世阿弥の言う「初心」を保ち続けることの難しさを感じる場面も少なくない。

幸い、優れた学生やスタッフに恵まれ、研究も軌道に乗ってきた。様々な機関から評価される機会も増えているが、個人的に最も誇りに思っているのは、この16年間で多くの博士を送り出したことである。本稿が掲載される頃には当研究室から24人目の博士が誕生しているはずだ。加えて、当研究室にポスドクとして在籍したメンバーが、現在フランス、イギリス、中国、インドなど各国でPIとして活躍していることも、大きな喜びの1つである。あまり誰かに褒められることもないので、自分で少しだけ誇っておきたい。



TUM Weihenstephan Campus 醸造所前(世界最古の醸造所)

5 月上旬

朝一番で電話が鳴る。他大学の友人D教授からだ。相変わらず甲高い声で話し始めるが、内容は朝に聞くには少し重い。それでも何とか対応する。ドイツでは重要な話ほど、メールではなく電話で行われることが多い。この国の様々な非効率さにも慣れ、長年外国人として過ごしてきたことで、ある種の耐性も身につけてきたように思う。鉄道の遅延や役所での煩雑な手続きにも、今では昔ほど動じなくなった。

午後は研究室の遠足で、別キャンパスにある醸造所へ。学生やスタッフが Maß Bier を片手に笑顔で談笑し、あちこちで笑いがこぼれる。酔いの回った学生たちに次々と話しかけられる。研究室の人数が、いつの間にか随分増えたことに気付く。

春の夜風の中、ふと足を止める。思い描いていた未来ではない。だが、これはこれで悪くない。

ドイツに渡って19年目に入った。人生の大半をこの国で過ごしていることになる。もはや何を基準に「ずれている」と言うのかも曖昧になってきた。それでも、長く外から日本を見てきたからこそ、自分にできることもあるのではないかと最近を感じている。日本の科学にも、少しずつ違う形で関わっていきたい。すでにいくつか取り組みも始めている。

気が付けば、思っていたよりずっと遠くまで来ていた。しかし、振り返ったときに「これでよかった」と言えるなら、それで十分なのだと思う。想定外の道にも、悪くない景色はある。

© 2026 The Chemical Society of Japan